

私の中の日韓関係

李 炯喆

Japan-Korea relations in me

Hyongcheol LEE

抄録/概要/要旨 本稿は筆者が青少年期には韓国で、留学生または教員として日本に滞在しながら経験・認識した日韓関係を私的レベルでまとめたものである。国交正常化以来、安保と経済を軸として日韓関係は拡大したが、関係の悪化と好転を繰り返してきた。まるでシシュフォスの大岩のような関係である。戦後最悪と言われている今日、両方の政府と民間レベルには頑なな非寛容があるが、それでも 両国の市民レベルでの関係は前進して、両国の人々も交流の主役になっている。普通の関係で新時代に相応しい関係を作ろう。

キーワード : 東京オリンピック、日本留学、金大中・小渕による日韓和解、普通関係の時代

はじめに

「私の中の日韓関係」は筆者が青少年期から日本に関心を持ち、特に留学生または教員として経験・認識した日韓関係を私的なレベルでまとめたものである。そのため、学術論文とは言えないが、同一人間による同一対象に関する数十年間にわたる認識の変化を検証したものである。

私のような年配の戦後世代に反日感情はあったが、日本という国は学ばねばならない隣国であった。アンビバレンスであったが、それが率直な感情である。

1. 少年期の日本

1.1 幼い時の記憶と親たちからの口伝

港口都市仁川の終戦時の人口は 25 万人くらいで、その中日本人が 2 万余人いて、日本人は主に山手町、本町、中町、宮町、新町、旭町などに居住したため、その地域が仁川府の中心地であった。大概、仁川地域の日本人は 1946 年 3 月までに引揚げたが、旧日本人町は相変わらず 1970 年代まで仁川の中心地であって昼夜問わず賑やかであった。日本人が引揚げてから、日本人の家屋には韓国人が住み着き、植民地時代のインフラ、建物などは殆どそのまま残っていたが、日本の象徴である仁川神社は日本人によって処分され、一部は韓国人によって放火された。私の家(旧花町)から数分の距離にあった仁川神社の跡地には仁川女子商業学校が建てられ、校内には倒れた石灯籠と階段などが残っていた。仁川の栗木里(現在の栗木洞)に日本人墓地があったが、戦後には手入れできなくなったため、墓地は荒れ果てて墓石は倒れ、1960 年代初めまでそのまま放置されていた。その後、公園に造成されたため、墓地の痕跡は残っていない。仁川の中心地には和食堂が残っていて、和食と弁当などを売り、新浦市場のおかず屋では佃煮など日本のおかずを売っていた。何より記憶に残るのは、母さんたちが着ていたモンペと女の子たちのおかっぱ頭である。文化というものは息が長いものと思っている。

植民地時代がもたらした有無形の遺産は韓国社会と韓国人の価値観にも影響して、戦後生まれの韓国人には親たちの体験が「親からの口伝」を通して、日本のイメージが伝わった。私も親と年配の知人らから日本について聞いたが、大抵彼らの経験は、植民地朝鮮で朝鮮に移住してきた植民地本国の日本人から経験したものである。朝鮮人の中には出稼ぎ、留学、徴用、兵士もしくは何らかの理由で内地日本の経験がある人々もいたが、大半の朝鮮人は外地朝鮮で日本を経験した。植民地時代の経験者の中には「あの時代が一番良かった」という人々がいた。戦後生まれ世代の感覚では、国が奪われ、異民族に支配され、差別的な社会構造の中で生きたため、その世代こそ最も強烈な反日感情を有していたはずだが、意外に植民地世代の反日の度合いは強くない。植民地世代にも個々人の境遇によって反日の度合いに違いがあろうが、なぜ戦前の世代がそのような思っているのかを自問してみる。彼らに民族意識はあったが、国民国家の経験、国民意識、国民の歴史観の不在のまま、植民地時代を生き抜いた世代である。植民地支配がいつ終わるか分からない遠大な時代に民族よりは自分・家族・家門の保全と利益を優先した。大半がまともな教育も受けず、熟練した技術も有しなかった彼らにとって、日本人は一等民族であって、学ばなければならない相手であった。子供の時、植民地時代世代の人々から時々「朝鮮人は叩かなければ言うことを聞かない」と聞いたことがある。その言葉に潜んでいる歴史性と意識を見れば、分かることであろう。

もう一つ彼らの対日認識を左右するのが、植民地時代と解放後の経験である。勤労働員、供出、徴用、徴兵などの戦争動員はあったが、大半の朝鮮人は朝鮮を離れることなく、朝鮮には殆ど空襲もなく戦場化することもなかったため、戦争の桎梏が分からなかった。異民族によって支配されていたが、植民地体制ならではの秩序と規律があってそれなりに社会が動いていた。却って解放後に政局の不安、左右の分裂・分断、朝鮮戦争の悲惨を経験した。経済的に

は低生産と貧困に苦しみ、社会的には無秩序と人間不信に陥った。解放の翌日から歓喜に溢れて急拵えの太極旗を心行くまで振った彼らだったが、解放の喜びも束の間、むしろ自国の実情にあまりにも絶望した。日帝が良かったと過ぎし日を懐かしがったのも無理はなかろう。

1.2 1964年の東京オリンピック

私が通った小学校は新興国民学校で、植民地時代には主に日本の子供が通った旭小学校であった。6年生の時、東京オリンピックが開かれて、その時に残っている記憶は三つある。マラソンのアベベ選手、日付入りの seiko 腕時計、東京オリンピックのカラー記録映画である。アベベ選手は前回のローマオリンピックでは裸足で走って金メダルを取ったため、世界的にも有名であって、東京でも金メダルを取ったが、東京では運動靴を履いて走った。アベベ選手が2年後に韓国の仁川・ソウル間の国際マラソン大会に出場したので、実際に走る場所を見物し、その大会でまたもや優勝した。東京オリンピック後、どういうわけか韓国では日付入りの seiko 腕時計をはめた人が増えた。なぜその時計がそんなに回っていたか、今も不思議に思っている。もう一つは、東京オリンピックのカラー記録映画を団体が観覧したことである。韓国にはカラーテレビがなかった時代でもあって色鮮やかな映像の印象が今も残っている。子供でありながら、韓国では何時になったらあんなオリンピックが開かれるのか、何時になったら韓国人選手も金メダルを取るのかと羨んだ。韓国人選手がオリンピックで金メダルを取ったのは、1976年のモントリオールオリンピックの自由型レスリングが最初であり、韓国でソウルオリンピックが開かれたのは1988年であった。

2020年東京オリンピックは1964年の栄光を再現して成熟した日本の先端テクノロジーを示す舞台になるはずであったが、残念ながらコロナ禍によって十分な成果をあげなかった。

1.3 1970年11月の三島由紀夫事件

高校時代になってから日本について少しずつ関心を持つようになった。兄が持ってきた日本の中古レコードで聞いた演歌のメロディーに韓国の言葉と音楽とは違う趣があることに気づいた。高校3年生の11月のある朝、新聞の1面トップに乗った三島由紀夫事件の記事と写真を見て「今も侍精神を持った人がいる」と衝撃を受けて、大学に進学したら三島の本を読もうと決めた。1971年ソウル所在の中央大学校政治外交学科に入学し、大学の休みには日本の小説を何冊か読んだ。『金閣寺』、『不道德教育講座』などの三島の本は勿論、『宮本武蔵』、『徳川家康』、『雪国』、『伊豆の踊子』などを読んだ。大学3年生の時から日本語の勉強を始めて、1年後には簡単な日本語小説が読めるようになったため、最初に読んだのが『坊ちゃん』であり、なんとなく自分の無鉄砲な性格と似ているなど思いながら読んだ。

2. 1970年代と朴正熙時代

1965年日韓国交正常化が実現され、日韓関係は経済と安保を軸として拡大した。日韓国交正常化会談中、韓国では会談に反対する激しいデモが繰り返されたが、朴正熙政権は推し進めた。韓国では1910年の日韓併合に賛成した高官らを売国奴と烙印を押し、植民地支配に協力した人々を親日派と罵倒している。当時、国交正常化を推進した韓国の政治家らが売国奴「李完用」呼ばわりされたが、朴政権時代に日本からの経済協力、ベトナム特需、中東の建設ブームなどによって近代化の成果が実って韓国社会は急速に変貌を遂げた。

2.1 米中接近と日本外交

1971年7月、米国が翌年のニクソン大統領の訪中を声明したため、日韓にとって大きな衝撃であった。日本は、米国が中国問題については日本と緊密に協議するという約束を守らなかったため、背信に近い戸惑いを覚え、一方韓国は全面的に安保を頼っていた米国が北朝鮮の同盟国である中共(中国)と関係改善することに衝撃を受けた。しかし、日本はアジア冷戦の呪縛から解かれて、独自の実利外交を行える好機を迎えた。一方、グアム・ドクトリンと米中接近によって韓国には朝鮮戦争前のように再び米国から見捨てられて孤立するのではないかという不安が募った。米中接近によるアジアデタントによって日本では革新と保守系を問わず政治家、財界人、マスメディア関係者らが北朝鮮を訪問して日朝間の交流が拡大した。自民党政権が韓国に偏って北朝鮮を等閑視した政策への反発、韓国の軍事情権に対する反発、北朝鮮を未知の神秘的な国と報道するメディアなどがもたらした相乗効果であった。

1972年10月、朴大統領は親衛クーデターを起こして維新政府を発足した。朴は大統領選挙制度を間接選挙に変えて長期的政権に乗り出して、北朝鮮との競争で勝つための総力安保体制の構築を目指した。当時、大学2年生だった筆者は政治権力の絶対化によって韓国社会が閉塞してゆくことを感じた。それで朴政権と民主化を求める反政府勢力との争いは避けられないものとなった。反政府知識人と学生らの逮捕、大学の閉鎖などが繰り返され、その争いの渦に日本のメディアと日本人が巻き込まれたので、日本では朴政権への反感が増幅した。日韓両国の政治家が有する対北朝鮮認識の相違も不和を招いた。韓国の場合、北朝鮮の南侵から始まった朝鮮戦争の悪夢と赤化統一(韓国の共産化)への警戒が基本的な認識であったが、他方日本の場合、デタント期においては韓国だけの安全よりは朝鮮半島の安定という南北政府の共存が基本的な認識であった。日本の北朝鮮に対する認識が甘いうえ、独裁権力を固めて行く朴政権に対する反感のため、自民党政権の中においてさえ北朝鮮に親和感を持つようになったと言えよう。それが韓国民に、日本は自国の利益のため朝鮮半島の統一よりも永久的な分断を望んでいるとの認識を与えた。

田中角栄内閣は1972年7月に成立して1974年12月に辞職したが、丁度、田中内閣期から日韓関係の悪化が見え始め

た。日本は早々と日中国交正常化を果たし、アジアデタントを背景に北朝鮮との交流も拡大したが、政府レベルでは韓国政府の頭越しに北朝鮮への急接近を図ったことはなく、積み上げ方式の域に止まった。しかし、韓国政府はその通りには受け止めず、韓国メディアも日本の対応を等距離外交と激しく非難した。あまつさえ、1973年8月東京で韓国政府の機関員らによる金大中拉致事件が起こり、翌年の8月にはソウルで在日韓国人による朴大統領暗殺未遂事件が起こった。国交正常化以来、日韓関係は最悪の関係に陥った。

2.2 文世光事件と反日デモ

1974年8月15日、光復節記念式をテレビで見ていた時であった。テレビ画面に黒い物体が走り、パンパンという銃声が聞こえ、演説中だった朴大統領は円卓の後ろに身を隠した。しかし、演壇の後ろに座っていた大統領夫人の姿勢が崩れ、一緒にいた要人らによって式場の外へ運ばれたが、夫人はその日の夕方に死亡した。在日韓人文世光が朴大統領を暗殺するため打った拳銃の玉が夫人の頭に当たったのである。文は北朝鮮の指令を受け、大阪府の交番で盗んだ拳銃を韓国に持ち込んで犯行を実行した。

日韓関係は前年度の8月に東京で起きた金大中拉致事件によって悪化していて、一応田中内閣との政治決着で収まったものの、朴政権の立場は非常に守勢に迫り込まれていた。文世光事件に対して朴政権は日本の責任も問い、捜査への積極的な協力を求めたが、日本政府の反応は謝罪もなく消極的であったため、朴政権は韓国民の反日感情に訴えて官制反日デモを繰り広げた。組織的に参加したデモ隊の人々も厭わずにソウルの日本大使館の前ではデモを繰り返し、日韓関係は最悪の状態に陥った。9月19日に日韓国交正常化時の日本代表であった椎名悦三郎特使が訪韓して朴大統領に謝罪をしたため、事態は収まったが、両国間には不信の滓が下りた。

2.3 日本留学

大学3年生から日本語の勉強をするようになった契機は、将来に日本研究者になろうと進路を決めたことであり、そのため日本留学を目指した。当時、韓国の大学では韓国外国語大学以外では日本語の科目がなかった時代であったので、個人的にソウル市内の日本語塾で5か月くらい文法を習ってから、その後は独学で勉強した。しかし、試練が待っていて大学3年生の初冬、兄が交通事故で亡くなった。それから1か月後、普段飲めないお酒を飲んだ父が私の部屋へ来て涙を見せた。生まれてから初めて見た父の涙であった。多分、「今からはお前がこの家の長男になる。しっかりと頼むよ」という涙であったと思う。否応なく長男になって精神的な重荷を背負ったため2度も留学の夢を諦めたが、夢のない生き方はあり得ないと思い、翻して三度目に留学を決意した。私の決意に親も反対しなかったため、そのまま押し進めた。植民地時代に貧農の娘として生まれ、普通学校(小学校)へ通えなかったため、日本語も韓国語も読めない無学の母が家の切り盛りをして生計を立てた。母は時々「私に字が読めたら」と嘆いたが、一生字を

書くことも読むこともできなかった。

日本留学を目指したが、金もコネもない中流家庭の私にとって日本の文部省留学生選抜試験に合格する道しかなかった。すべての学問分野で33人を選抜する試験であって、1978年8月大学助教の資格を持って受けたが、合格するとは思わなかった。しかし運よく合格し、1979年4月3日に生まれて初めて金浦空港でJAL機に乗って大阪伊丹空港に到着した。僅か1時間半くらいの飛行であって日本と韓国がそんなに近いとは思わなかった。翌日、新幹線に乗って広島に向かったが、留学先として東京の方を希望していた私にとって広島は予想だにできなかった都市であったので、がっかりした。しかし、広島の地で國光家の方々と出会い大変お世話になり、特にお父さんは戦前に朝鮮南部の順天で暮らしたこともあって、筆者を大変可愛がってくれた。今はお父さんも、友人孝明さんもこの世にはいないが、一生感謝している。

広島大学大学院で研究生を経て修士課程を学び、神戸大学大学院で博士課程を修了するまで6年半留学した。留学する前には日本人の先生は強面の権威的な人かなと思っていたが、日本で出会った先生たちは非権威的で優しい人々であった。研究生の時には大山巖元帥の孫である大山梓先生の指導を受けたが、大山先生が1年後に定年したため、修士課程と博士課程では五百頭旗真先生の指導を受けた。最初は明治維新について研究するつもりであったが、五百頭旗先生から明治維新は古い時代であるので、戦前昭和期の軍部の政治支配について研究するように勧められた。韓国人ながら昭和時代について分かるようになって良かったと思う。もう一人の初瀬龍平先生からは学問の厳しさを教わった。普段は非常に優しい先生であったが、鋭い指摘に感服するばかりであった。良い先生たちと巡り合ったことを一生の誇りと思い、感謝している。

1985年10月下旬、博士学位記をもらって帰国した。学位記を見た父は涙を浮かべながら喜んだ。昔の父たちは子供の前で涙なんか見せない怖くて強い人たちであったが、2回目に見る父の涙であった。

3.1980年代の日韓関係

1979年10月末、朴正熙大統領が暗殺され、韓国は第2のソウルの春を迎えたが、光州事件と全斗煥軍部政権の誕生によって民主化は失敗した。新冷戦のため日米関係が強化され、その影響を受けて朝鮮半島の安保が重視されて、全斗煥政権と中曽根政権との関係が親密になった。

3.1 全斗煥大統領と中曽根首相

無秩序な民主化運動の隙を狙って全斗煥將軍らの新軍部勢力はクーデターで権力を掌握した。全政権は行き詰まった韓国経済の回復のため、安保を理由にして鈴木内閣に60億ドルという膨大な借款を要求したが、その交渉は難航した。1982年11月に成立した中曽根内閣が40億ドルの借款提供に応じ、中曽

根首相は訪米の前に韓国を訪問して韓国語で挨拶し、韓国の流行歌を歌ったことで韓国国民を魅了した。その時まで日本の政治家の中でそれほど韓国国民に好感を持たせた人はいなかった。中曽根首相は全大統領とも個人的な信頼関係を築き、大統領退任後、江原道の山寺へ隠遁を余儀なくされた時にも贈り物を送って全を慰労した。

3.2 歴史摩擦の恒常化

1980年代に入ってから2度の教科書問題、中曽根首相の靖国神社参拝問題で日本と中韓の間に歴史摩擦が生じた。歴史の問題が外交問題として争点になったのはそれが初めてであった。1982年の教科書問題を皮切りに、次第に歴史問題の摩擦が恒常化し、教科書問題の増幅（1986年、2001年、2005年）、慰安婦問題、南京事件の真相をめぐる論争、靖国神社参拝問題などが争点となった。さらに日韓には竹島問題が、日中間においては尖閣列島と東シナ海のガス田問題、国民間の相互認識のずれ、大国化する中国への警戒心に至るまで、領土、文化、歴史、安全保障の分野で全面的な摩擦を引き起こしているため、日本のアジア外交のネックとなった。

歴史問題については認識の一致はあり得ないことである。ましてや加害と被害が糾う周辺国との歴史問題にはナショナリズムまでが絡むことによって認識の一致はあり得ないことであるが、冷静に考えれば、相手の認識を理解することはできよう。歴史観の固定化(イデオロギー化)によってそれさえも拒めば、仕方ないことである。

3.3 日韓関係の好転

1981年9月、オリンピック開催をめぐって韓国が日本の名古屋市との競合で勝ち、1988年ソウルオリンピック開催が決定された。その時、日本人はそれほど失望せず韓国に祝いの言葉を送った。漸く韓国の明るいところが見え、日本人の対韓認識も変わった。1980年代初めころまで日本のメディアは韓国に批判的であったが、1980年代半ばから批判的な報道が少なくなったことを感じるようになった。さらに1983年から韓国では海外旅行の制限が緩和されて普通の人々が海外へ出ることができ、1989年からは全面的に自由になった。そのため、日韓両国の地域・団体の交流も進んで、顔の見える交流が始まった。筆者も留学中に韓国の知り合いと大阪で会ったことがある。1987年6月、全政権が民主化要求を受容して6.29宣言をしたため、韓国の民主化が始まり、民主化も日韓関係改善の要因となった。この雰囲気はソウルオリンピック後まで続いたが、1990年代になってからは再び冷却した。

4. 韓国の民主化と金大中・小渕による日韓和解

1990年代初から日韓関係は政府レベルでも、民間レベルでも冷却した。その背景には歴史問題だけではなく、成功モデルとして崇めてきた日本経済のバブルが弾けて、日本が長い不況のトンネルに入ったことで、中進国に上がった韓国国民の認識が変わったことも一つの原因であった。また、

民主化を実現した金泳三政権が対日政策で高姿勢に出たことも作用した。両国では相手の矛盾についておもしろおかしくこきおろす書物がよく売れた。日本では『醜い韓国人』が、韓国では『悲しい日本人』がよく読まれた。

4.1 金泳三政権と日本

1987年6.29宣言以後、韓国では徐々に民主化が進んだ。それでも学生運動と労働争議が続き、犠牲者が出たが、割と大過なく民主化が進み、1993年2月32年ぶりに金泳三文民政権が誕生して、制度的にも民主化が実現され、韓国社会は明るくなった。金大統領は陸軍内の新軍部勢力(全斗煥勢力)を追放して文民支配を確立し、金融実名制を実施して金融取引の透明性を促進するなど民主的な政策を実施したが、竹島問題、大統領の失言などによって日本との関係はうまく行かなかった。民主主義時代になっても日韓関係は良くならないと思えた。金政権末期の1997年秋にアジア通貨危機が起きて、韓国経済が破綻寸前まで陥った。所謂IMF危機であって、韓国では「第2の国恥」と受け止めた。韓国の通貨危機は金大中政権になってからIMFと日本の新宮沢構想の支援を受けて急速にV字型回復をしたが、多くの韓国の企業が外国に売却され、新自由主義的な経済政策のため、韓国に良からぬ影響ももたらした。非正規職雇用の拡大、経済的な格差の拡大などが起きたが、典型的なことが名誉退職(早期退職)であって、民間企業の場合52歳くらいで退職するのが普通になった。第2の就職先を探さねばならなくなった彼らは「最初の職場がいかに良かったかを痛感した」と漏らした。

4.2 再び日本へ

留学後、韓国に帰って翌年から母校で非常勤講師として教えたが、なかなか定職に就くことができなかった。その間、高麗大学の崔相龍先生に大変お世話になった。東京大学で博士号を取った崔先生が私の母校に着任されたので、日本留学を目指していた筆者には憧れの的であった。帰国後、何度も研究プロジェクトに入れてもらったので物心両面にわたって助かった。崔先生は金大中政権の時、2年間駐日大使を務めた韓国切っ手の知日派である。大使をやめた崔先生とは東京と長崎でお会いできた。

帰国してからあれこれ8年経った初冬に金沢大学に在職していた何時も愉快的な仲間定形衛教授から誘いがあった。42歳になった1994年10月から金沢大学法学部で教鞭をとった。金沢行きの旅客機に乗る際、失われた人生が悔しくて涙しながら飛行機に乗った。3~5年くらい知的リハビリをしてから韓国に戻るつもりであった。しかし、思うようにはいかず、金沢大学で4年半教えてから1999年4月からは長崎県の新設校シーボルト大学に転勤した。未知の長崎を「西の果て」と恠しく思いながらも「アジアが見える丘」と思い直して長崎に着いた。大村湾を見下ろすシーボルト大学は小さい県立大学であるが、施設も良く落ち着いて仕事することができるまなびの杜である。留学生の時、広島に3年、神戸に3年半、教員として金沢に4年半、そ

して長崎に 23 年間暮らしたので、我が人生の半分弱を日本で暮らしたことになる。その割には日本語も日本に関する知識も不十分など多いと思っている。家族を仁川に残して単身赴任をしたので、大学の休み期間に年 3 回くらい帰省する生活を 27 年間繰り返していたが、何時も心の中には韓国の実家と日本の大学があって、まるで幽体離脱のように意識は別の世界にあった。金沢大学に行った時、娘は小学校 5 年生、息子は 2 年生であったが、息子が「パパ、お金のために日本へ行くの。僕が靴磨きをするから日本へ行くな」と言ったことを覚えている。幼い子供を残して日本へ来たが、二人とも大学を出て、今は 30 代半ばを超え、それぞれ好きな分野で仕事をしている。27 年間の家長の長期留守中に家庭を良く守ってくれた妻に感謝する。

4.3 金大中・小渕による日韓和解

日韓の不便な関係は 1998 年 10 月の金大中大統領と小渕首相による政治的和解で新たな転機を迎え、小渕首相は植民地支配について「お詫びと反省」を、金大統領は「両国が過去の不幸な歴史を乗り越えて和解と善隣友好協力に基づいて未来志向的な関係を発展させるために、お互いに努力することが時代の要請である」と述べた。その後、「21 世紀の新しい日韓パートナーシップに関する共同宣言」が発表され、日韓関係における歴史問題摩擦の悪循環を断ち切った。金・小渕の日韓和解はいきなり実現したことではなく、保守勢力には不評判であるが、慰安婦に関する河野談話(1993 年)、細川首相の侵略戦争発言(1993 年)、村山首相の戦後 50 年衆院決議(1995 年)のような歩み寄りがあったからこそ実現したことである。両国関係は 2002 年のワールドカップ共催の成功と多角的な交流に負って、以前と比べると文化や民間交流の面で著しい変化が見られた。勿論、竹島(独島)問題、教科書問題、政治家による問題発言などで軋むことはあったが、過去のような感情的な大爆発は見られなかった。

日韓関係が好転したのは言うまでもなく両国の内外情勢の変化とともに、長年にわたる歴史摩擦の疲れ、価値観の共有、実用的な交流のような変化があったからである。2001 年 12 月、明仁天皇が誕生日に述べた「韓国とのゆかり」の発言はこの時期の日韓関係を象徴するものである。

4.4 日本文化解禁と民間交流拡大

金大中・小渕による日韓和解の象徴が日本文化の段階的な解禁であった。戦後、国家も国民も背負った韓国の歴代政権は反日政策を採りながら、「文化的鎖国」のように日本文化の流入を頑なに禁じてきた。12 年間続いた李承晩政権も、18 年間続いた朴正熙政権も、その後 12 年間続いた二つの軍事政権も、それでは戦後韓国社会に日本文化の流入が全くできなかったのかと言えば、実情は違う。その時期中には政府が禁止しただけであって、非公式には日本文化が韓国社会に流入した。大概、以下のような光景であった。

①漫画と TV アニメ：1960 年代韓国の家庭にもテレビが普及し、テレビ放送局は夕方の時間帯に子供向けのアニメ

を流した。それから 30 年間私の世代から私の息子の世代までもが見たテレビのアニメは殆どが日本のアニメであった。人気漫画もそうであった。『黄金バット』、『妖怪人間』、『海底少年マリン』から『ドラゴンボール』まで名前を挙げれば、枚挙に暇がない。

②小説と海賊版レコード：日本でベストセラーになった小説は、殆どが韓国で翻訳されて、よく読まれた。私も『氷点』、『雪国』、『日本沈没』を読み、海賊版レコードで覚えた「上を向いて歩こう」、「ブルーライト横浜」、「恋人よ」は日本語の分からない韓国の若者らが口ずさんだ曲である。③明洞の裏路地と清溪川古本屋：その時期にもソウル市内には日本書籍を販売する書店が何件かあって、ソウルの賑やかな盛り場明洞の裏路地には日本の演歌テープの海賊版を売る屋台もあった。さらに清溪川古本屋へ行けば、日本の古い雑誌と週刊誌もあったので、制限的ながら日本の風俗と接することができた。しかし、たまに韓国当局の取締りが行われて、テープや雑誌などが押収されることもあった。

④日本文化院：駐韓日本大使館の日本文化院は日本文化禁止時代でも無風地帯のようなどころであって、日本の図書も閲覧でき、日本映画を定期的上映していたので、マニアたちは日本映画を楽しんだ。

⑤深夜放送：韓国政府も日本からの電波を遮れず、釜山辺りの人々は日本のテレビを視聴し、ソウル辺りでも夜には雑音交じりの日本の放送が聞けた。非常に限られた人々と組織のことであったが、日本の日刊紙の購読もできた。

1998 年から公式的に日本文化が韓国社会に流入されたが、旅行自由化によって日本を訪れた韓国人が日本から CD とビデオテープを持ち込み、家では衛星放送の視聴ができる時代になったため、時代遅れの解禁であった。それでも韓国には日本文化流入で韓国映画と大衆音楽が競争に負けるのではと、警戒する声もあったが、結果は正反対となった。『冬のソナタ』のような韓国ドラマが日本で大ヒットし、日本のテレビで韓国ドラマを流さない週がないほどであった。韓流の始まりであった。日本の映画も韓国で上映されたが、『千と千尋の神隠し』のようなアニメはヒットしたが、一般映画の興行は良くなかった。

4.5 シシュフォスの大岩

金大中政権期の日韓関係は良好であって、2001 年に新しい歴史教科書をつくる会による歴史教科書問題が起きたが、それほどの波紋はなかった。盧武鉉進歩政権になってから 2005 年の竹島問題で日韓関係は軋むようになったが、以前とは違って冷え切ることはなかった。それには、日韓両国民の自由な往来と交流、韓国の民主化による価値観の共有、さらに韓流ブームと韓国の大衆文化を楽しむ層の定着(深韓流)の影響もある。顔が見える草の根の民間交流が盛んになったので、国交正常化の 1965 年には 1 年間で 1 万人が両国間を往来したが、2010 年には 1 年間 500 万人が行き

来した。2018年には韓国人が750万人、日本人が300万人往来した。しかしながら、日本では嫌韓・反韓を煽る書物・報道が勢いづくようになって、両国関係が悪くなると、必ずどこかの出版社から韓国を扱き下ろす本が出版され、瞬間的にせよ週間ベスト10に入ることも時々ある。韓国人の大半が反日感情を持ち、大半の韓国メディアが反日的な報道をしてはいるが、反日感情を煽る本・雑誌も少なく、売れ行きも日本ほどではない。日韓関係はまるでシシュフォスの大岩のようなものであって、関係が改善されたかと思うと、その次は山頂まで押し上げた大岩が再び麓に転がり落ちるように、徒労の繰り返しが続いている。それでも日韓関係は前進している。

5. 悪化する日韓関係

5.1 李明博政権と日韓関係

2008年2月、李明博保守政権が成立したことで、日韓関係は再び改善された。李は大阪生まれであり、5歳の時終戦を迎えて家族とともに釜山に引揚げ、貧困で苦労を重ねながらも高麗大学に進学した。1964年、同大学の商科大学学生会長になった彼は日韓会談に反対する猛烈なデモを主導した罪で有罪になった経験の持ち主でもあった。現代建設の会長、国会議員、ソウル市長を経て大統領となったが、どちらかと言えば親日的な政治家であって、訪日して明仁天皇に謁見した際黙礼をしたことで、韓国では批判された。

2011年8月、韓国の憲法裁判所が「韓国政府が日本軍慰安婦被害者の賠償請求権に関し具体的解決のために努力していないことは違憲」と判決し、同年12月には韓国挺身隊問題対策協議会（挺対協）がソウルの日本大使館前の歩道上に慰安婦像を設置した。憲法裁判所の判決があった以上、韓国政府も日本と交渉するしかなく、李明博政権は民主党野田政権と交渉したが、失敗した。2012年8月、李はその腹いせに竹島に上陸したため、日本が猛反発し、韓国国内でも李の行動に批判の声が上がった。

5.2 朴大統領と安倍首相の確執

自民党が第46回総選挙で圧勝をして3年ぶりに政権党に復帰し、2012年12月第2次安倍内閣が発足した。韓国では翌年の2013年2月に朴槿恵政権が登場した。李大統領の竹島上陸から始まった日韓関係の悪化に改善の糸口が見えない中、朴正熙大統領の長女が大統領に就任したことで、日韓関係改善も期待されたが、両政権はうまく噛み合わなかった。大統領就任式に参加した麻生特使の歴史関連の発言に、朴は数日後の3.1節記念式で厳しく応酬した。

実は朴と安倍の両政権には相手国政策に構造的な変化があった。日本から中国へと東アジアのパワーシフトが始まる中、朴政権には貿易と北朝鮮問題で中国への依存度が高くなった。一方、価値観外交を標榜した安倍政権は力外交を展開して、日米・日中関係がうまく行けば、韓国は付い

てくると見ていた。そのため、韓国の中国傾斜に不満を募らせた安倍内閣は慰安婦問題で韓国に譲歩しようとしなかった。2014年8月、産経新聞ソウル支局長加藤達也が韓国内の風聞を纏めた「朴槿恵大統領が旅客船沈没当日、行方不明に…誰と会っていた？」という記事が問題となり、韓国検察が加藤を名誉棄損で起訴・出国禁止の措置を採ったことで、日本政府だけでなく殆どの日本メディアが韓国を猛烈に批判した。日本メディアの朴批判に反朴の韓国人さえも余りにもひどいと舌を打った。加藤支局長の無罪判決で日韓関係が鎮静化した2015年12月に慰安婦問題の合意ができ、日本が提供した資金で「和解・癒し財団」を設立した。漸く日韓関係に改善の兆しが見える中、違憲・違法の容疑で朴大統領の弾劾運動が始まり、ソウルの中心街では大規模な蠟燭デモが繰り広げられ、反朴勢力のみならず朴に失望した普通の市民も参加した。結局、憲法裁判所の弾劾認容によって朴大統領は2017年3月に罷免された。

5.3 文政権と最悪の日韓関係

朴槿恵大統領の罷免による第19代大統領選挙で2017年5月文在寅進歩政権が誕生した。文は蠟燭デモで市民らの支持を集めて、大統領選挙戦で圧勝したが、勝因は朴大統領の失政からの反射利益であった。文政権は北朝鮮と中国とは接近しながらも、安倍政権とは全く噛み合わず、慰安婦の和解・癒し財団解散、国際観艦式での旭日旗掲揚問題、元徴用工判決問題、哨戒機へのレーダー照射問題、文喜相国会議長の天皇発言などで摩擦を引き起こした。1965年以来、日韓関係がそれほど噛み合わなかったことはなかった。元徴用工問題をめぐる新日鉄住金への賠償判決と同企業の株を差押えて処分することについて、文政権は司法部の判断と見做して関与しなかった。日本側の第3者による仲裁委員会の設置提案にも応じず、2019年6月大阪で開かれてAPEC会議まで文政権は具体的な解決策を提示しなかった。文政権側は、過去の保守政権が疎かにしてきた植民地時代の清算、被害者個人の権利と人権尊重が重要であり、それこそ民主主義時代の正義であると見ていたであろう。大阪APEC会議で主催国の安倍首相は文大統領と会談もしなかった。さらに7月4日、日本政府は韓国に対して半導体などに使う3部品・素材の簡単な輸出審査から個別に輸出審査を行なう方針に切り替えると発表し、8月22日28か国のホワイト国から除外した。安全保障のため、韓国向けの輸出管理を厳格化するという日本政府の説明がどうであれ、実質的な報復措置であった。しかし、その後の経過を見れば、当初の騒ぎと予測とは違って、韓国側にさしたる混乱は生じなかった。

価値観外交を標榜した安倍政権は韓国の保守政権とも進歩政権とも対応したが、いずれともうまく行かなかった。2012年(民主党の野田内閣)と2013年(自民党の安倍内閣)の『外交青書』では「日韓関係・二国間関係一般」に「日韓両国は、自由と民主主義、基本的な人権等の基本的な価

値を共有する重要な隣国同士であり、北朝鮮問題を始め、核軍縮や不拡散、気候変動等、地域・地球規模の様々な課題について連携して協力していくことで一致している。」と記した。2014年の「自由と民主主義、市場経済など基本的な価値と利益を共有する最も重要な隣国」の評価を、2015年からは「自由と民主主義、基本的な人権等の基本的な価値を共有する」との表現がなくなって、「最も重要な隣国」に格下げした。2016～17年には戦略的利益を共有する最も重要な隣国にとどまったが、2018年の表現は「良好な日韓関係は、アジア太平洋地域の平和と安定にとって不可欠である」と一般的な表現になった。さらに、2019年の安倍首相の施政演説「第百九十八回国会における安倍内閣総理大臣施政方針演説」の「地球俯瞰外交の総仕上げ」には韓国についての直接的な言及はなかった。もう韓国を特別扱いしないとの意思表示であった。

5.4 経済制裁という新しい類型の紛争

戦後最悪と言われる今回の不和には以下のような特徴があつて、今後の日韓関係は従来からの関係から変わることになる。

- ・従来の摩擦は歴史・領土問題であつて、大体政治的に揉み消したが、今回は歴史問題が政治的な破綻を招き、経済問題に飛び火した初めての紛争であつた。
- ・経済紛争になると、対日依存度が高い韓国が圧倒的に不利になるのは明らかなことであり、部品・素材の国産化・輸入先の多角化までは少なくとも5年から20年はかかる。不可能なこともある。1、2年でできることではない。
- ・今度の不和は文政権による反日政策と安倍内閣の価値観外交の衝突によるものであつたが、今後の日韓関係の新しい転換点となることには間違いない。仮に来年の大統領選挙で保守政権が成立しても従来とは変わる日韓関係になるであろう。

これより事態が悪化すれば、日本からは金融制裁など厳しい制裁もあるが、将来のため、韓国は過度な日本経済への依存から脱却すべきである。国交正常化の時、日本からの有償5億円の資金が韓国経済発展の誘い水になったが、2019年までの対日貿易累積赤字は6,237億ドルであつて、韓国保有外貨4,036億ドルの1.5倍を超えている。近隣に日本のような先進経済大国がいたので、韓国の発展も早かったが、頼りすぎた。鵜飼経済と呼ばれる所以であるが、以前と比べると韓国経済の対日依存度は減つてはいるものの、2020年も208億ドルの赤字であつて、相変わらず日本が貿易の最大赤字国である。すべての貿易相手国から黒字を上げることはできないが、対日貿易赤字はあんまりである。経済のグローバル化によるバリューチェーンの国際分業化の要因もあるが、金と時間をかけて部品と中間財などを開発するより、日本から輸入した方が手取り早く簡便であつたため、「対日依存については我々も知っている

が、今は無理だよ」というのが対日貿易をする韓国人らの口癖であつた。まさかと思われていた日本から経済制裁を食らった。財閥は量的な膨張ではなく質的な深化に力を入れて重要な部品・素材の国産化、輸入と技術協力の多辺化を図るべきである。台湾のTSMCから習うべきである。韓国経済が過度な日本依存から脱却した時こそ、健全な日韓関係が維持できよう。

5.5 日本ボイコット運動

以前にも日韓関係が悪くなると、韓国ではちょっとしたタクシー乗車拒否、飲食店への出入り拒否のような感情的なボイコット運動があつた。ホワイト国除外から始まった日本ボイコット運動は文政権が旗を振ったわけではなかったが、親文・反日的な市民団体が中心となり、規模も大きかった。日本旅行、ビールなどの食品、衣類、自動車などが打撃を受けたが、韓国内の日本ブームの主役でもある20代も大勢参加した。不買運動中にも日本へ行く観光客もおり、仁川のeマートなどでは相変わらず日本のビールと食品を販売していて、日本食品を買うからといって貶されることはなかった。

しかし、今日はグローバリゼーションの時代であり、相互浸透が深化していて個人に嗜好と好みがあるため、個人レベルでの不買運動は時間が経つにつれて薄れる。案の定、2020年末には日本製品の輸入が徐々に増えている。確かに不買運動で日本に分野別・地域別に影響を与えたが、日本経済全体から見れば、あまり影響はなく、韓国も返り血を浴びることとなって航空社、旅行社、日本風の飲食店などが影響を受けた。不買運動ではなく健全な批判と対話で問題を改善する知恵が欲しいところであつた。

6. 日韓関係の新しい構築を目指して

6.1 普通の人々の時代

筆者の周りを見れば、韓国に住んでいる日本人、日本に住んでいる韓国人が何人かいる。その理由はともあれ、筆者の実家の近くに韓国男性と結婚した日本人の奥さんが住んでいて、マートでアルバイトしている。韓国人が日本に、特に日本人が韓国に住むには目に見えない精神的なハードルもあるが、彼らと彼女らは文化のメッセンジャーであり、苦楽を共にする隣国からの友人である。

筆者が40余年前に留学生として訪日した時と、現在の日韓関係を民間レベルで比べればすっかり様変わりしている。一先ず言えるのは、所詮「食べる人ぞ食べるキムチかな」とも思われたキムチが日本の食文化で市民権を得たことである。40余年前には一般のスーパーにはキムチがなく、在日の店・市場でしか買えなかった。しかし、今は大きいスーパーには韓国産、または日本で付けたキムチが何種類か置いてある。もう一つは、両国民の間では両国の芸能人が膾炙されていることである。日韓両国間には歴史問題、領土問題と愛国心の問題も横たわっていて、なかなか心の

扉を開こうとせぬ人々も少なくないが、ソウルの明洞や九州の観光地には両国からの観光客で溢れている。その底辺には名もない両国民が人的交流を重ね、相手の文化を受容しながら築き上げた相互理解がある。文化というものには四海同胞の真の和解に繋がる遠回りの道であろう。そのような勢いを政治とメディアが後押しすれば、何時かはより良い両国関係が訪れると信じている。

6.2 対馬と韓国人

韓国人が日本の中で歴史的に一番ゆかりを感じている所は対馬(대마도)である。倭寇の本拠地、朝鮮通信使、さつま芋、釜山の倭館などは対馬と関わった歴史の痕跡である。高麗と朝鮮時代に朝鮮軍によって征伐された歴史があったせいか、韓国人の中には対馬は韓国領土という人もいるが、それは個人の認識であって歴史的には根拠がなく、韓国政府もそのようなことは言っていない。韓国の釜山と対馬の北端の比田勝の展望台までは 49.5 キロしか離れていないので、晴れた日には肉眼で見える。元々、漁業の盛んな島が今は大分衰えて人口 3 万人の島になったが、人口の数十倍ものの韓国人観光客が訪れて、2018 年には過去最高の 41 万が訪れた。最初は地理的に近い釜山とその周辺の慶尚道地方の人々が大量往来したが、2018 年の夏に本学の実施する「しまなび」で学生らとともに比田勝で来島した韓国人らを調査してみると、釜山から大分離れたソウル、龍仁、江原道の束草からも来ていることが分かった。なぜ、来るのかと聞いたら、近くで費用も安く、食べ物がおいしいと言う。その時驚いたことは、韓国人が高速船に乗ってよくも来ることであった。朝から夕方まで高速船が何回か接岸するたびに 100 人以上の韓国人が下船して貸し切りバスに乗って港を離れた。むしろ、比田勝が収容しきれない状態であった。

しかしながら、対馬は日韓関係のバロメーターであって、関係が悪くなると韓国人観光客がぐっと減る。韓国がホワイト国から除外された後、2019 年 11 月には対前年同月比 9 割も減少した。筆者も公務のため対馬を 5 回訪れたことがあって、少しは対馬の商売人たちの反応が分かる。対馬の数軒の飲食店には韓国人を断る貼紙が貼ってあったが、いくら近くでも文化と言動が違うためトラブルもあったようである。しかし、現に韓国人が来るから島の景気がよくなったことで、「韓国人が来ないと困る」と思う人々もいた。そのように思う人の方が多いであろう。

6.3 政治の力とメディアの力

既述のように 2013 年から 15 年にかけて朴政権と安倍政権の不和によって、その火種はメディアと民間交流にも及んで、日本での韓流ブームは冷め、韓国を訪れる日本の観光客も激減した。日韓の不和はそれが初めてではなく、18 年間の朴正熙政権時代(1961.5～1979.10/維新政権

1972.10～1979.10)、1980 年 5 月の光州事件と全斗煥政権前半期にも関係が悪かった。日本のメディアは、韓国に対しては経済発展を認めたものの、クーデターで政権を握った朴正熙政権を独裁政権ととらえ、非民主的な暗いイメージで報じた。それに輪をかけたのが妓生(売春)ツアーであって、そのため韓国旅行を忌避する人々もいた。対する北朝鮮の報道は神秘的かつ友好的にとらえて、金日成主席に下で団結した社会主義国、サッカーなどスポーツの強い北朝鮮と、良いイメージを与えた。その時期でさえ、独裁政治の度合いは北朝鮮の方が遥かに厳しかった。

1973 年の金大中拉致事件、1974 年～75 年に日本人が民青学連事件で逮捕されたため、日本メディアの韓国報道はより厳しくなった。韓国政府は朝日、読売、毎日、通信社などにソウル支局閉鎖・記者追放・新聞販売禁止などの措置を行い、批判的な記事には黒く墨を塗った。その時期、それでも韓国に友好的なメディアは産経新聞のみであった。韓国政府と日本メディアとの関係が変化したのは、ビルマを訪問した全斗煥大統領を暗殺しようとした 1983 年 10 月のラングーン事件後と言われている。1990 年代の民主化時代に慰安婦問題、竹島問題、教科書問題など歴史問題で日韓が対立する中、日本の保守勢力を擁護する産経新聞が反韓的になり、進歩的な朝日新聞が保守勢力の言動を批判することで韓国側に理解を示した。

1970 年代と 2010 年代を比較すれば、前者の時期には日韓両政権の間には冷戦と反共を軸とした親米関係、先進経済を軸とした後見的な関係があって日韓関係の不和を緩衝した。しかし、後者の時期になると冷戦も終わり、中国を挟んで多角的な戦略関係となり、経済関係では対日依存は変らなかったものの後見的な関係が薄くなった。そのため、第 2 次安倍内閣以後、勢いを盛り返した日本の保守勢力も韓国に対して厳しくなった。

日韓の政治関係が両国民の認識を変えることは自明であり、メディアも相当な影響力を持っている。唯、1980 年代以後からは両国民の草の根の往来が多くなったため、個々人の判断力も認識の基になっているが、政治関係とメディアによって相手国の認識が大きく変わることがしばしばある。

6.4 普通の関係で行こう

日韓関係が植民地支配の歴史、経済依存、米国を軸とする安保関係などにおいて対等で正常ではなかったため、そのギャップを政治エリート間の人間関係、冷戦の論理、様々な言葉の修飾で埋めた。しかし、1990 年代以後アジアは多国間関係に発展し、韓国も独裁国家から民主国家へ変わったため、日韓関係にも変化があった。殊に両国民の交流が日韓関係の底辺をなしている。

国交正常化後の日韓関係には幾つかの浮き沈みがあった。1970 年代初めの金大中拉致事件と文世光事件による両国関係の悪化、1980 年代からの歴史摩擦の恒常化、1990 年

代初めからの両国関係の冷却化と竹島問題の先鋭化、2000年代になると日韓和解と韓流ブームの熱が冷め、2013年から両国は政権どうし、マスメディア、国民が不仲になってしまった。将来にもその摩擦は再演されるであろうが、根本的な解決ができなくても、相手の立場を理解して相互認識を深めれば、非生産的な摩擦を避けることはできる。1990年代末の小渕政権と金大中政権時代には両国関係が好転した。その後、何度も紆余曲折があったが、一度出来上がった道は仮に人々が通らなくてもその跡は残るものである。ありのままに見て、ありのままを言う普通の関係で行こう。

おわりに

筆者は日本研究者になるつもりで留学をしたが、日本で長らく教鞭をとるとは夢にも思わなかった。それも長崎で23年間住んだので、長崎が第二の故郷になった。広島大学へ留学する前、ある後輩が「先輩が日本に入る時は広島だが、出る時は長崎ですよ」と冗談を言ったが、まさにその通りになった。さらに長崎へ来てから19世紀末に長崎と筆者の故郷仁川と多くの交流があったことが分かった。その時代に長崎－仁川の定期航路があって、長崎県の人々が仁川に移住した。彼らの商業活動を支援するため、1890年に第18銀行仁川支店が開設され、支店の建物は今も仁川市中区に残っている。しかし、残念なことに長崎と仁川は姉妹関係ではない。

本稿は筆者が日本で書く最後の拙文である。定年後、韓国でも日本に関心を持ちながら暮らすことになるが、文部省留学生として十分な奨学金をもらいながら6年半留学し、教員として27年半勤めながら韓国の家族を養った有難さは忘れない。最後に、日韓両国が正に近くて良き隣国になれるように切に願う。漸く身も心も一つになって仁川に戻る。お世話になったすべての方々に深くお礼を申し上げる。

注

参考資料

- ・外務省『外交青書2012年～2018年』
- ・趙世暎著/姜喜代訳『日韓外交史』平凡社、2015年。
- ・李 炯喆「アジアデタントと日韓関係」『国際情報学部紀要第8号』2007年。
- ・_____ 「植民地下の朝鮮人たち」『国際社会学部研究紀要第3号』2018年。